

3歳児の遊びを通しての言語発達

——社会的な言語を中心に——

雨森 良子
(兵庫教育大学学校教育学部附属幼稚園)

I. 研究の目的及び方法

入園当初の3歳児の遊びを観察していると、ほとんどの幼児が、自分の好きな遊具（ブロック、抱き人形、ままごとセット等）を手に持ちひとりで遊んでいる。他の幼児について余り関心がなく、交流も少ない。他者とのかわわりと言え、同じ物が欲しいときと起すわずくの引張り合いくらいである。

こうした経験の繰り返しの中で、ひとりで遊ぶよりも、誰か他の幼児と一緒に遊ぶ方が楽しいと思いはじめ、友達を求めようようになる。だが、どの様にすれば友達と上手にかかわりが持てて遊べるようになるのかその方法が分からずトラブルを繰り返していく。

友達との接触、相互作用において、言葉の持つ力は大きい。そこで本研究では3歳児の遊びの中で芽生えていく社会的な言語の発達を、実践記録の一部を事例として検討し合わせてその発達を助長する要因についても言及したい。

II. 事例と考察

1. 担任との関係の中で

入園当初の3歳児は、保育室に置かれた遊具を使いひとりで遊んでいることが多い。他の幼児が手にしている遊具に眼がいくと、構わずそれもなつたり自分の物にしようとする幼児もいる。一日のうちに何度もこの様な場面に遭遇するが、物を数打つけるなどの危険が伴う場合を除いて、担任としては子どもの活動の中に入りず、できるだけ見守るようにした。幼児自身が、困難に直面したとき自ら解決の糸口を見つけていくといういわば問題解決の能力を身につけさせたいからである。

ひとしきり引張り合ってどちらかが遊具を手にとると、もう一方の幼児は諦めて他の遊具で遊ぶことも多い。また、諦めきれずにいつまでも大声で泣いている幼児もいる。そうした幼児に対しては、共感的対応を心がけ、例えばみぞぐ抱いて頭をなでながら話しかける。

T「どうしたの？」

C「……。」

T「K君のブロックが欲しいかったの？」

C「うん。」

T「そう、でも、あれはK君が使っているからね。先生と一緒に、あれと同じの探そうか。」

担任とはらくブロックの容器から、様々な色や形のブロックを見つけ出すうちに幼児の気持ちもおさまり、違う遊具でも遊ぶようになる。遊具の取り合いなどで泣き出した幼児の中には、担任のところにやってきてひとしきり泣き、しばらくして泣きやみまた遊ぶ始める幼児も多かった。筋道立てて話さないくやしさを、担任に抱かれ静めていったようだ。担任の共感的対応の中で子どもの言葉を引き出すことがこの時期特に重要となる。

2. 友達とのふれあいの中で

1学期の半ばになると、組の友達の名前を少しずつ覚え、共に遊ぶようになる姿も見られる。けんかをして泣いている幼児に、数人の子どもがかけ寄り、頭をなでてなぐさめている。

I思「ぷちゃんが泣かしたんか。」

T思「そうや、ぷちゃんや。」

M思「……。」（泣いてうなずく。）

T思「ぷちゃんが取ったんやろ？」

幼児同士の会話の中で、けんかの原因を尋ねようと、解決しようとする動きが出てくる。今度は、ぷ思に対して この子どもたちがつめ寄り、M思を泣かしたことの抗議をする。今度はぷ思が泣いて担任に救いを求めに来る。

ぷ思「ほく何もしてへんのに泣かす。」

T「ぷ君、何もしてないの？」

ぷ思「何もしてへん。」

T「でもMちゃんが泣いてたね。」

ぷ思は自分の行動に気付いたものの、どうして他の子どもたちに泣かされるのかは理解できなかった。友達意識が芽生えはじめ、例えば泣かされていようどもへのいたわりの気持ちも見られるようになってきたと考えらる。

3. 友達との遊びの芽生えの中で

次の会話は、ままごと遊びの場面で交されたものである。数名の幼児が不満そうに担任のところにやってきた。

A子「先生、Nちゃん怒って。」

T「どうして？」

A子「『入れて』も言わんと入ってくる。」

T「『入れて』って言ったと一緒に遊ぶの？」

A子「分かん。」

Y子「Nちゃん、無茶苦茶するもん。」

遊びの中にルールが生まれかけてはいるものの、理解しない幼児に対しては排他的である。

4. 友達の遊びへの誘いかけの中で

2学期、運動会が終わった頃になると、幼児の遊びが入園当初に比べて充実してくる。大型積み木の構成遊びの基地づくりや建物ごっこ、ままごとや店屋ごっこなどが見られるようになる。幼児は、自分で見つけたり遊びに夢中になるが、遊びたい気持ちをもちながら、まだ他の幼児との遊びに入っていない幼児もいる。そんな幼児を見て、他の幼児が遊びに誘う場面も見られる。

H子「Rちゃん、おいで。入れてあげる。」

R子（黙ってコーナーに入ってくる。）

H子「ねえ、こんなんですか？」（お手玉をテーブルの上に置くと見て、ままごとのテーブルをふいて見せる。）

R子（無言で見ているが興味を持った様子。）

H子（しばらく待って）「ええわ、もう、わたしがするわね。」

R子に遊びを伝えようとするH子は、家庭では年の離れた兄や姉に遊んでもらい、主体的に遊べなかった。しかし最近、幼稚園では遊びに意欲を見せるようになり、すすんで遊びの中へ入っていくようになった。友達とうまく遊べなかったつい最近の自分の姿をR子に見て、声をかけたのだろうか。

5. 遊びの発展の中で

ある女児が、落々別の遊びをしていた2つのコーナーに大型積み木を渡してつないだ。積み木と積み木で囲まれた空間は風呂になった。

Y子「ねえ、どっちから入っても良いんだよ。（2つのコーナーを指す。）気持ちが良いよ。」

Y子とO子がコーナーから積み木の中へ入ってくる。

Y子「ね、良いでしょ。ああ、さっぱりした。」

この後、この積み木を通してコーナー相互の交流が始まった。幼児自身による場づくりと、友達への呼びかけから遊びが広がった一例である。

また、年少児が年長児の売り買い遊びに招かれた経験から、自分たちのままごと遊びに店屋ごっこが加わって遊びが発展したことがあった。

昨年夏の修学旅行が残っていたタプクリ絵本が並べられて本屋ができた。どんぐりを色セロファンで包み葉子屋もできた。

「いっしょい、いっしょい。」

「これ下さい。」

「はい、どうぞ。遊園地の券おまけです。」

上記のような会話が交された。これは、いうまでもなく日常生活で経験したことの模倣であるが、遊びの中へうまく取り入れて使っていた。この店屋ごっこは幼稚園や家庭で1ヶ月以上も継続していた。

幼児が、担任や友達との関係をつくり、維持し発展させていく手段としての言語の発達の様子を幾つかの事例をあげて追ってみた。幼児が自分の伝えたいことを言葉で十分表現出来ないもどかしい時期の担任の共感的対応の大切さ、自分たちの言葉を見つけて友達とのふれあいを確かなものにしていく過程、あるいは、友達との遊びの中での言葉かけが遊びを発展させるきっかけとなることなどについて検討した。一年間の実践の中で、遊びが発展すると、友達同士の会話が弾んで、多くなることを、幾度となく観察した。言い換えると、遊びの創造が、社会的な言語の発達につながっているのではないかと思う。

Ⅲ. 結び

一年間の実践を振り返り、遊びの中で言語の発達に必要と重要な要素は、幼児ひとりひとりが遊ぶ力を持つことにあるのではないかと考える。担任や友達との関係の中で遊びの力は醸成されるけれどもとりわけ自分で遊びたいという意欲が大切であると考えているのである。その意欲的な遊びへの取り組みを通して、困難な場面や喜びの場面などの場に応じた言語や行動を習得していくのであろう。遊びたい気持ちを持ち、3歳児の主体的な活動の芽生えによって、互いにかかわり合いながら遊びを発展させたいと思うようになり、会話が生まれ、言葉が育っていくのではないか。自分たちの力を出して遊ぶようになると、友達を待ったり思いやりったりする心も育っていくと思われ。

なお、本論では、主として事例に若干の考察を加える形で報告したが、今後、計量的な面から言葉の発達をとらえることも試みたいと考えている。